

渡月橋

(全 11 ページ)



京都・嵐山の一番人気は何といても“渡月橋”です。その優美な景観と歴史の深さから、多くの観光客を魅了する名所処です。この橋とその周辺には自然美・歴史・文化が融合したスポットが点在しており、訪れる人々に多彩な楽しみを提供しています。





渡月橋は桂川左岸（北側）と、中州である中之島公園の間に架かる橋で、橋長155m、幅員12.2m、車道は舗装2車線で、両側に縁石で一段高くした石畳の歩道があります。桂川の兩岸地域を結ぶ重要な交通路で京都府道29号線の一部となっています。現在の橋は1934年（昭和9年）に完成した鉄骨鉄筋コンクリートの桁橋で、橋面の中央部は1m上げて弓なりの形状にし、高欄を木造の角格子式とし、旧木造橋の意匠を受け継いで周囲の景観に配慮しました。遠方から見ても、鉄筋コンクリート造りであるとは容易に判断できない工夫がなされています。

{渡月橋歴史}

桂川右岸（南側）にある法輪寺を中興した空海の弟子である道昌法師が平安時代の承和年間（834～845年）に架橋したのが始まりとされています。ただ、法輪寺の前身とされる葛井寺が奈良時代の僧・行基によって和銅6年（713年）に創建された伝承があり、加えて正倉院文書における天平14年（742年）の葛野郡の地名に「橋頭保」が見えることから、奈良時代にすでに橋がかけられていた可能性があります。平安時代には法輪寺橋と称され今より100m程上流にあったようです。

鎌倉時代中期、嵯峨の離宮亀山殿を在所とした亀山上皇が橋の上空を川上から川下の移動していく月を眺めて「くまなき月の渡るに似たり」との感想を述べたとされ、これがのちの「渡月橋」の命名の由来とも云われています。当時の法輪寺橋は朱に塗られていたそうです。

南北朝時代の康永元年（1342年）7月、荒廃した亀山殿を天竜寺へと改める際の、木引式において、足利尊氏・直義臨席のもと、この橋の修理を終えた“わたり始め”が行われています。

貞和2年（1346年）、天竜寺の開山にあたった夢窓国師が周辺の優れた10の名所

を命名し、「天竜寺十境」を定めました。この時、橋を「度月橋」と命名し十境の一つに選んだそうです。



室町時代中期に応仁の乱の兵火で焼け、橋は絶えて久しかったようです。乱後十二年を経た文明十一年（1479年）天竜寺塔頭真乗院の景徐和尚を中心に再架橋の寄付浄財を募る勧進が始まっています。

江戸時代初め慶長十一年（1606年）に嵯峨の豪商角倉了以（すみのくらしらうい）が保津川の開削工事を行った際、橋を現在の位置に架け替えたとされています。

安永二年（1773年）より始まったとされる法輪寺での“十三詣り”において、参拝の帰路、渡月橋を渡り終えるまでに後ろを振り返ると授かった知恵が返上されるとの言い伝えが残ります。



幕末の禁門の変でこの橋は法輪寺とともに焼け、明治初年頃に人がやっと通れる程度の仮橋が架かったそうです。比較的堅固な木造橋に架け替えられた明治20年ころには高瀬舟に乗って西高瀬川を走行してくる花見客がいたとのこと。また、八つ橋や草餅を頭上に乗せ、売り子が橋の上を往来していたようです。この橋も5年後には大水で流されました。

明治42年に木造橋が架けられたが、腐朽し、加えて昭和7年7月2日の洪水で橋の一部が流失したことから、昭和9年（1934年）現在のコンクリート橋が竣工しました。親柱には高さ3.5mの石柱を用い、その上に春日灯籠形の電灯を取り付けましたが昭和26年の台風13号でなぎ倒されました。その後は、1959年の補修、1995年（平成7年）から6年かけた大改修を得て今に至っています。1975年には歩道が追加されています。

ながらく橋には照明施設はなかったのですが、2005年（平成17年）地元の団体「京都嵐山保勝会」が多数の協力を得て“サイフォン式小型水力発電機”を設置し夜間帯にLED照明が明かりを放っています。

2006年12月30日未明、歩道に車が乗り上げ、欄干を突き破り中州に転落する事故が起きています。

2013年台風18号で橋が冠水した被害があります。





—政府災害調査—

2018年9月台風21号により東側の欄干が100mにわたって倒れた被害があります。



{渡月小橋}



渡月橋は実は、2つに分かれた様な形体です。まず、桂川左岸（北側）を渡り歩くと右岸にたどり着きますが、ここは桂川の中にあるいわば、中州状態になっており（中之島公園）、ここで橋はいったん終わります。つづいてそのまま南下すると渡月小橋と呼ばれる北橋に到ります。中央に橋脚を有する橋長19m、幅員11mのI鉄筋コンクリートです。そのままさらに南下するとやっと渡り終えたこととなります。昭和9年に新造された渡月橋とともに新たに架け替えられた小橋です。

{保津川と桂川の違い}

嵐山の観光の目玉の一つが保津川の「保津川下り」。京都を流れる川の代表格の「桂川」。保津川も桂川も同じ1本の川です。その境目が渡月橋で、その上流が保津川、下流を桂川と称します。そしてこの両方を統合した名称が「大堰川（おおいがわ）と呼ばれています。5世紀初めまでは葛野川と呼ばれていたそうです。

{秦氏の時代}

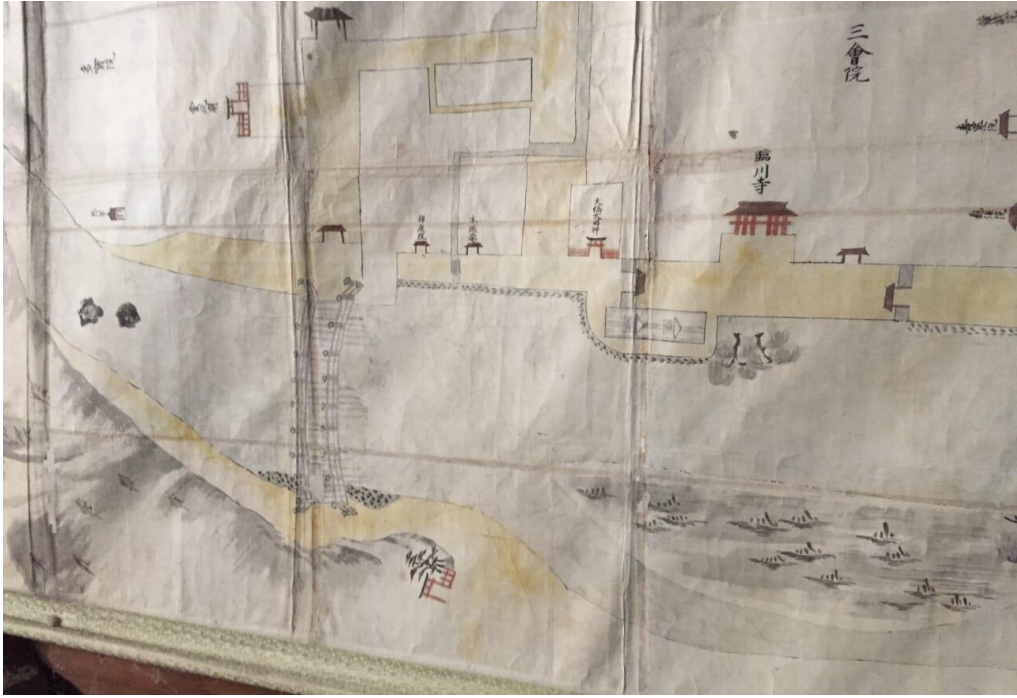
嵯峨嵐山の一帯は古墳時代・5世紀後半（450年～500年）に朝鮮半島から渡来移住してきた秦氏（はたうじ・はたし）の朝廷より下賜された領地で、秦氏の土木技術で桂川に堰（せき）を造成し灌漑工事など土地開発を行ったと伝わります。のちに長岡京が建設されたのも秦氏の技術力があって実現されたともいわれます。そして平安時代の初期に桂川に初めて橋が架けられたのは、この優れた土木技術に秀でた秦氏だったとも伝えられます。法輪寺橋をかけた道昌和尚は秦氏の後裔とも云われています。

{応永釣命絵図}



最初に架けられた橋は今の渡月橋が架かっている場所より上流で川幅の狭い、水深が浅く、流れも穏やかな場所だったのでしょうか。

室町時代のころにも現在地より150mほど上流に架かっていたとされます。その証拠が嵯峨の「鹿王院」に残っている「応永釣命絵図」という応永年間に描かれた当時の地図から確認できます。応永33年(1428年)、4代将軍・足利義持の命により臨川寺・往持月溪が制作し、天竜寺に伝わったものを鹿王院虎岑(こしん)和尚が江戸前期の元禄年間に写したもので15世紀前半の嵯峨一帯の絵地図です。



{渡月橋と天竜寺}



足利尊氏・直義兄弟は、後醍醐天皇の鎮魂のため、暦応2年（1339年）夢窓疎石（むそうそせき）を開山として天竜寺を創建しました。この結果、15世紀前半には天竜寺正面の天下龍門に通じる東西道路と山門前を横切る南北道路を主要路として、五山天竜寺と十利の第二臨川寺・第五宝鍾寺（鹿王院）の禅刹3ヶ寺が核となり、約百五十カ寺に及ぶ塔頭からなる夢窓疎石を始祖とする嵯峨門派とよばれる一大禅林が出現したそうです。同門前には寺家被官層の居住区や大工・木版工・金融を担当した土倉などさまざまな商工業者の在家などを付属させ複合的な門前都市が形成されました。

大堰川河畔には丹波方面からの物資に課税する川関が設けられました。この地図から判明することは天竜寺の南側に大堰川に向かって南へまっすぐな道がありその場所の延長線上に橋が架かっていたと思われます。丹波からの筏物流物質に課税をする利権を持つ寺から見れば誠に都合の良い場所だったのででしょうか。以上から推察すればこの時期天竜寺は渡月橋の一切を維持管理していたと思われます。当時の天竜寺は寺域950万平方メートル、現在の嵐電帷子ノ辻駅あたりまで及ぶ広大な土地を有し、小寺159カ寺を数えたそうです。しかし、嵯峨門派の一大禅林は応仁3年（1468年）9月7日の応仁・文明の乱ですべて焼失して、その後は諸塔頭の経済的基盤であった荘園は武家の横領に遭って次第に失われて再建は実現せず衰退の一途を辿ります。

現在、当時のままに残るのは、天竜寺、臨川寺、鹿王院、金剛院のみで、宗派の寺院では大覚寺、釈迦堂、清涼寺、二尊院です。

{法輪寺}



法輪寺へはここより上がってゆきます

嵐山・渡月橋の南側の山腹に位置します。本尊の虚空蔵菩薩は「嵯峨の虚空蔵さん」として親しまれています。知恵、芸事の上達、また丑年・寅年生まれの守り本尊として信仰を集めます。十三詣りや針供養、漆祖神の寺として、さらに境内には電気・電波を守護する鎮守社である電電宮が祀られています

寺伝によれば、もともとこの地には秦の始皇帝の子孫である弓月王（融通王）の一族・秦氏が建てた葛野井宮（かずのいぐう）があり、三光明星尊が祀られていたという。その地に和銅6年（713年）に、行基が元明天皇の勅願によって国家安泰、五穀豊穰、産業の興隆を祈願する木上山葛井寺（かづのいでら）として堂舎を建立したのが当寺の始まりであるとわれます。以後は真言宗寺院として歴代天皇の勅願所となり、勤操・空海・明慶・日蓮などが参籠したということです。天長6年（829年）空海の弟子である道昌が当寺に虚空蔵菩薩像を安置したといわれます。また道昌は大堰川を修築し、承和3年（836年）には寺への参詣道でもある橋を架けています。この橋が後に亀山上皇によって渡月橋とも呼ばれるようになったそうです。（江戸時代までは正式名称は法輪寺橋）貞観10年（868年）には寺名を法輪寺と改名したのです。貞観16年（874年）に山腹を切り開いて堂を改修し、天慶年間（938年～948年）に空也が参籠して勧進し新たに堂塔が建てられたといえます。応仁元年（1467年）、応仁の乱の際に西軍の畠山義就が東軍の成見院光宣を当寺の門前で迎撃した際に戦火を受けて被災し以後衰微してしまったそうです。

慶長2年（1597年）後陽成天皇により法輪寺再興勧進の勅旨を下賜され、前田利長の帰依を得て堂塔が再建されました。慶長11年（1607年）9月に盛大な落慶法要が行われました。

元治元年（1864年）7月の禁門の変（蛤御門の変）の時、長州藩の軍勢が対岸の天竜寺に駐屯して幕府軍や薩摩藩と合戦を行った際に巻き込まれて全焼しました。

1884年（明治17年）に本堂が再建されて、以後も堂塔の再建が行われ1914年（大正3年）に復興がなされました。



法輪寺本堂